

STS Network Japan 夏の学校 2009 のお知らせ	p. 2
STS Network Japan 第 1 回定例研究会@関西のお知らせ	p. 4
代表就任のご挨拶	p. 5
【STS Network Japan 20 周年企画】	
STS Network Japan の 20 年 初代代表中島先生インタビュー	p. 6
Yearbook'90 ~ '00 販売のお知らせ	p. 10
20 周年企画 シンポジウム・研究会テーマ募集のお知らせ	p. 11
【報告】	
冬のシンポジウム ー変遷する「正常」ー参加報告記 (標葉隆馬)	p. 12
春の研究発表会	p. 16
I LOVE YOU からはじめよう! STS の目的 人類の智慧の完成<波羅密> (前島修)	
柏原東ジュニア・サイエンス・カフェに取り組んで (平井 俊男)	
学生によるサイエンスカフェの実践とその教育的意義ー Scienthrough の活動を事例としてー (中川 威)	
必要なのは知識なのか?	
ー日本の大学生における遺伝とゲノム変異に関する基礎知識調査からの問題提起 (東島 仁)	
ユビキタスネットワーク社会と子供の安全・安心ー保護者に対する意識調査分析から (江間 有沙)	
STS Network Japan 2008 年度 総会および会計報告	p.21
2006 年第 2 号 夏の学校報告記事に関する補足	p.23

NEWS LETTER

2009 vol.20 (1)

STS NETWORK JAPAN

STS は Science, Technology, and Society の略称です

夏の学校 2009 「科学技術コミュニケーション再考」

近年、科学者を始めとする専門家は、社会においてより積極的な役割を期待されています。例えば、英国においては、2000年の” Science And Society” という報告書を契機として、科学者が一般の人々を始めとする社会との対話を目指した双方向での科学技術コミュニケーションが重要視されるようになりました。

このように科学技術コミュニケーションが重要視される動向は日本においても同様です。近年では、ほぼ毎日のようにどこかでサイエンスカフェが開催される程、科学技術コミュニケーションは流行しています。また、2005年度以降には、科学技術振興調整費によって、科学技術コミュニケーションに関するプログラムと人材養成が始まりました。

「科学技術コミュニケーション」は「社会と科学」を考える重要なキーワードの一つであり、「社会と科学」をつなぎ、科学を社会の中でより良いものにするために重要な活動であると言えます。例えば、サイエンスカフェの多くは、研究成果を分かりやすく伝えるというものであり、専門家ではない人々の科学の理解を深め、科学の楽しさを伝えることに役立っているとも考えられます。しかし、科学の楽しさを伝えるだけで、「社会と科学」はより良い関係を築いてゆけるのでしょうか。

現在の流行をただのお祭り騒ぎではなく、「科学技術コミュニケーション」を根付かせるきっかけにするためには何ができるのか、これまでの科学技術コミュニケーションに問題はなかったかということ、手法からその理念まで含めて今一度考える必要があるのではないのでしょうか。そのような問題意識から、「科学技術コミュニケーション」について振り返り、議論を深めることをテーマに今回の STS 夏の学校を開催したいと思います。

学生をはじめ、科学コミュニケーター、現場の科学者、STS 研究者やメディア関係者、科学技術をめぐる社会的制度や公共政策の在り方に興味のある方など、科学技術コミュニケーションについて様々な観点から議論してみたいという考えをお持ちの方々参加を心よりお待ちしております。

開催日：2009年9月4日（金）～9月6日（日）

（詳しいスケジュールはプログラム作成後にお知らせします）

開催地：石川県青少年総合研修センター（金沢駅より「92番 鈴見台2丁目經由朝霧台行」「鈴見台1丁目」下車
徒歩7分）（<http://www.ishikawa-seisoken.jp/index.html>）

〒920-0834 石川県金沢市常盤町212-1 TEL 076(252)0666

参加費：<学生> 一泊 7000円 二泊 13000円

<一般> 一泊 8000円 二泊 15000円（ともに、朝食付き）

◆ 申込スケジュールなどは、下記の通りとなっております。皆様ふるってご参加ください。

1) 発表申込受付締め切り 7月20日（月）

（とりあえず資料だけほしいという方は、この日までに申込書の「プログラムを送ってください」に丸を付けて送付してください。プログラムができしだい、ご連絡いたします）

2) 発表要旨締切 7月31日（金）

（発表テーマのタイトル、400字程度の要旨と簡単な自己紹介文をご連絡ください。
夏の学校のしおりに掲載させていただきます）

3) 参加申込受付締め切り 7月31日（金）

（発表のない方は、この日までにお申し込みください。

また、夏の学校のしおりに掲載する簡単な自己紹介文をお送りください）

◆ 申込先（原則として以下の書式をご利用の上、Eメールでお願いします）

STS NETWORK JAPAN 事務局

メールアドレス：office@stsnj.org

----- STS NETWORK JAPAN 夏の学校参加申し込み -----

STS NETWORK JAPAN 夏の学校2009に（参加します / プログラムを送ってください）*

宿泊日（9月4日 5日）※宿泊を希望する日を選択してください

氏名（フリガナ）

性別（男・女）*

連絡先（所属先・自宅・E-mail）*

E-mail アドレス（ ）

所属先：〒

Tel:

Fax:

自宅：〒

Tel:

Fax:

発表（する・しない）*

発表される方のみ講演題目（ ）

自己紹介文：

*いずれかに○印をしてください。

複数必要な方はコピーしてお使いください。E-mailでの申込も同様の書式でお願いします。

STS Network Japan

第 1 回 関西定例研究会のお知らせ

6月28日に、STS Network Japan 研究会を行います。

今回の研究会は、今後関西圏にて定期的に行っていく研究会の第1回目となります。

定期的な研究会を通じて、関西圏における STS 関係者のネットワーク作りと情報交換の促進の一助となればと考えております。

第1回目となる今回は、京都大学の伊勢田哲治氏、大阪大学の山内保典氏からの発表をしていただき、議論を深めていきたいと思っております。

皆様、奮ってご参加下さい。

◆日時：6月28日（日）14時～17時

◆場所：京都大学北部キャンパス農学・生命研究棟1階セミナー室

◆発表者ならびに概要について

○伊勢田哲治氏（京都大学）

「STS とクリティカルシンキング教育：実り多い融合は可能か」

<概要>

いわゆるクリティカルシンキング教育の中では、哲学、心理学等さまざまな分野の知見が取り入れられているが、統計資料の読み方、科学方法論の基本、心理学の常識といった、科学コミュニケーション的な部分も存在する。そこでのコミュニケーションのモードは基本的に欠如モデル的である。こうした現在のクリティカルシンキング教育のあり方を、STS の視点を取り込むことでより豊かなものにしていくことはできるだろうか。また逆に、こうしたクリティカルシンキングの教育内容を取り込むことで、STS の側が豊かになるということはないだろうか。今回の講演では、上のような視点から、これまであまり接点をもってこなかったこれら二つの分野を橋渡しすることを試みる。

○山内保典氏（大阪大学）

「研究を正しいと認める基準は、どうつくられるのか？」

<概要>

あるデータを、分野Aの人に見せると「こんなデータじゃ、研究にならない」と言われる。一方で、分野Bの人に見せると「これは珍しいデータだ。面白い研究だね」と言われる。データ1つをとっても、分野によって「研究に使える／使えない」の基準が違うらしい。しかも時代をさかのぼると、1つの分野でも正しい研究の基準は変化し続けている。

じゃ、基準をつくっている最中って、いったい何を話しているんだろう。誰がどんな役割を果たしているんだろう。社会も影響できるのかな。なんてことを、2000年におきた「旧石器発掘ねつ造事件」を題材に調べました。「その時、基準は動いた」現場からの迫真の報告です。

代表就任のご挨拶

標葉隆馬

(京都大学大学院博士課程)

今年度は STS Network Japan 設立 20 周年という節目の年であるそうです。そのような節目の年にあって、STS に今後どのようなことを期待し、また STS はどのようなことをすべきであるのかという規範的な領域まで含めた問いを再検討し、そして STS Network Japan として今後何をしていくのかという議論することには意味があるように思えます。STS はいくつかの略語を意味しますが、恐らくは主に二つのルーツを持ったものであると思います。一つは、“Science Technology Studies” と総称される学問領域群（科学社会学、科学史、科学哲学、etc）、ひどく乱暴に言えば既存のディシプリンや方法論でつながった STS であると言えるかもしれません。もう一つは、“Science, Technology, and Society”、こちらは目的でつながった STS であると言えるのではないかと思います。もちろん、それぞれ二つの STS は、互いに関心やテーマ、そして関係者自身が折り重なっているのです、きれいに分けることは出来ないでしょう。また、分ける必要性もないのかもしれませんが、しかし、一方で、前者の STS 研究者、そして後者の目的を持って STS に参入してきた自然科学の研究者を始めとした多様な STS 関係者が、どれだけ協働し、Network として適切に機能できているかという点は再検討すべき点であるように思えます。その際には、学会という括りでないからこそできる Network の範囲と機能をどのように考え、実行していくのかという点も重要であるように思えます。このような観点から、STS Network Japan として、文字通りの意味での Network の充実をさらに行っていければと考える次第であります。

また、近年は科学コミュニケーションが非常に注目されていたように思われます。一方で、科学コミュニケーションの目的や理念については、きちんとした議論と検討がなされないままに流行が膨らんでいったという印象も拭えません。一時期の流行が、やや収まりつつある今だからこそ、科学コミュニケーションについての手法、目的、理念まで含め、批判的に（そして建設的に）再検討を行うことも STS の緊急の役割であるのではないのでしょうか。

以上のような視点から、STS に関わる関係者間の更なる Network の拡大と強化、そして科学コミュニケーション再考ということを念頭におきつつ、今年度の活動に貢献できればと考えております。至らない点も多々あると思いますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

20周年企画：STS Network Japan の20年

初代代表 中島秀人氏インタビューより

STSとはなにか

- STS は、科学技術史ではない
 - STS は、科学社会学ではない
 - STS は、理科教育の改革ではない
 - STS は、環境教育ではない
 - STS は、科学技術批判の運動でもない
 - STS は、二つの文化をつなぐものではない
- では、STS とは何なのか。

「STS とは、科学技術の社会的側面についての人文・社会科学的な研究・教育である」

これは、1990年9月29日に行われた STSNJ 第三回シンポジウムで中島秀人氏が語った言葉である。「この定義はこれから10年以上使っていこうと思っているんです。この定義は簡単に変えられない」の言葉通り、2008年の科学技術社会論学会で、小林博司氏もこの定義に言及された。

2010年3月に、STS Network Japan (以下NJ) は20周年を迎える。区切りの年を迎えるにあたって、簡単にNJの歴史を振り返ってみたい。そこには常に「STSとはなにか」「STSNJとは何なのか」という問題に対する葛藤が見え隠れしている。

I期：松原さんがお金取ってきたの('90~'93)

1989年、当時東大の助手だった中島秀人氏の部屋には、院生が頻繁に出入りしていた。当時の東大の先端研は、自由になんでも研究をされる開放的な雰囲気があり、中島氏の部屋には、STSという何かおもしろそうな響きのあるものに惹かれた他研究室の人たちが集まり、関連雑誌を読んだり議論を交わしたりしていた。ただ、研究費はなかった。そんな中、やはり他研究室の院生の一人である松原克志氏は、中島氏の海外出張中、「地球環境財団」の奨励金に応募し、なんと見事助成金を獲得してしまったのである。

- これで何かやりましょうよ、中島さん。
- えー、じゃあ研究会でもやりましょうか。

こうして、1990年3月26日、上智大学にて記念すべき第一回シンポジウムが開催されたのである(研究会構想が先か、助成金獲得が先かは異説もあり)。20名集まれば上出来と考えていたシンポジウムは、蓋を開けてみたら54名と2倍以上。当初は、STSと言えば、SISCON に代表されるような「新しい理科教育」(当時はそう理解されていた)と、公害問題への関心から派生した環境教育、そしてエジンバラ学派やSSKなどに代表されるような科学知識の社会学といった、複数の異なる立場からの参加者が混在していた。それは第一回シンポジウムの話題が「大学における『科学と社会』教育の実践(笠耐氏)」と「イギリスにおけるSTS(高田紀代志氏)」であったことから伺える。

しかし、当然だが、このような状況では掲げられて

いる「STS」とは何なのかがよくわからない。そこで、冒頭に掲げたような中島氏の「STSとは~ではない」の第3回シンポジウムにたどりつくのである。

こうして、STSという枠で結びつけられた緩いネットワークは、頻繁にシンポジウムを重ね、91年7月には初の夏の学校を開催、教材交流会や研究発表会・総会などを開催するようになり、2年目、3年目と着実に会員を増やしていった。

しかし、会員が増えるにつれ、個人のSTS観やNJに求める機能の齟齬が、徐々に浮き彫りとなってきた。それに向かい合うために、1993年3月には「どうするSTS Network Japan」という討論会が開かれる。

ここで、現在も受け継がれているNJの方針が決まった。NJは異分野交流の場、ネットワーク機能を提供する組織であって、STSとはなにかを定義・議論したり、学会などの研究組織に特化することはしない。そのような組織は、NJと独立に作るべきであって、相互に対等であるべきである、というものである。

代表	年	月日	テーマ
I 中島秀人	1990	3/26	第1回シンポジウム 大学における「科学と社会」教育の実践・イギリスにおけるSTS
		5/13	第2回シンポジウム STSの課題と現実
		9/29	第3回シンポジウム 私のSTS観
		12/22	第4回シンポジウム 日本におけるバイオエシックス・科学技術論の視角
	1991	2/2	第5回シンポジウム STS、教育の現場から
		3/30	第6回シンポジウム STS、研究・教育の国際動向
		4/27	第7回シンポジウム 研究開発制度と教育制度(村上陽一郎氏講演会)
		5/18	第8回シンポジウム 科学技術と社会を見る眼(中岡哲郎氏講演会)
		7/12~14	夏の学校91(委員長 調麻佐志)
		11/2	第9回シンポジウム 環境・倫理・教育
	1992	1/18	第1回STS教材交流会
		3/14	第1回STS研究発表会・総会(12件)
		5/18	第10回シンポジウム 科学報道を考える
		7/17~19	夏の学校92(委員長 松山圭子)
11/14		第11回シンポジウム (STS関西シンポジウムとの共催) 日本におけるSTS教育・STSにおける「科学」とは	
1993	1/9	第2回STS教材交流会	
	3/13	第1回STSNJ討論会 どうするSTS NETWORK JAPAN	
	3/14	第2回研究発表会・総会(7件)	
	6/5	第12回シンポジウム 若者の科学技術離れ	
	7/23~25	夏の学校93(委員長 大辻永)	
	10/16	第13回シンポジウム STS教育とは何なのか	
	1/8	第3回STS教材交流会	
1994	3/19	第14回シンポジウム 大学におけるSTS教育	

II期：キミ、次の代表ね（'94～'97）

このころからN JではなくてもSTSと名のつく、あるいはSTS的な活動は広まりつつあった。その中でN Jはどのような位置にいるのか、どう機能するべきなのかを、会員間で明確に共有できていたかはわからない。その揺れ動きを象徴するかのよう、94年に「STSネットワークジャパン解散の提案」がニューズレターに掲載された。ここでは「情報提供・共有の広場」であるはずのN Jが実際は数人しか情報の集積と伝達にコミットをしていない、と問題提起がされた。賛否両論、喧々譁々の議論がネットで交わされることとなったが、結局解散に至らなかったのは、4月からは事務局も新体制が敷かれていたこと、連絡組織としての役割や多様な人が徹底的に語り合う場としての「夏の学校」を提供するN Jは、やはりまだまだ潜在的需要が存在するとの見解が多数を占めたからだろう。

さてその新体制の代表の小林信一氏であるが、2つほど彼から始まったことがある。1つは、代表就任挨拶で、自らの専門を科学技術政策と述べているように、N Jの研究・教育・環境といったテーマに、新たに「政策」という視点を投げかけたことである。これによって会員層に厚みが増えた。次の代表の野村氏も、ニューズレターに、「小林氏の時代に会員の幅が大きく拡大した」と述べている。1995年11月に科学技術基本法が施行されたこともSTS的活動の後押しをしたといえよう。第17回シンポジウム「サイエンス・コミュニケーション'95」は、日本科学技術振興財団との共催であり、文科省からも発表者が出ている。その後も第18回、第19回と共催シンポジウムが続き、96年には21世紀文化学術財団「科学技術と社会」プロジェクトと協賛シンポジウムを開催している。

さて、話は戻って小林氏から始まったことのもう一つであるが、それは代表の選ばれ方である。当時イヤーブックやニューズレターの袋詰めは大学内の水飲み場付近で、世話人たちがせっせとやっていた。ある日、何人かが作業をしながら、時代代表は誰がよいかを話し合っていた。そこに、たまたま遅れてきた小林氏。その場で「次期代表」を指名されたとか。ちなみにこの「いきなり指名」の伝統は今でも受け継がれている。

III期：与党と野党があつてこそ（'98～'01）

98年3月16日から22日までの一週間、東京・広島・京都の3か所で「科学技術と社会に関する国際会議」が、科学技術庁や日本学術振興会などの後援のもと、開催された。N Jも後援団体として名を連ねているこの会議の影響を一言でいえば、STS N Jを学会化するかの論争を引き起こしたことだろう。N Jの役割は、学会化ではなく、ネットワークを構築するものという意識が強かった。しかし、一方でここまで来たのであれば、研究・教育の方針などを体系化する必要があるのではないか、という声も大きくなっていった。時代の流れとしても、STS研究を後押しする動きがでてきている中、決断が迫られていた。

	代表	年	月日	テーマ
II	小林信一	1994	3/20	第3回研究発表会・総会（10件）
			5/14	第15回シンポジウム Australian Social Analysis of Science and Technology (Brian Martin氏後援会)
			7/22～24	夏の学校94 STS入門講座+技術とは何か？（委員長 松原克志）
	小林信二	1995	3/18	第16回シンポジウム ビッグサイエンスとSTS
			3/19	第4回研究発表会（年会）・総会（9件）
			7/21～23	夏の学校95 生命と環境（委員長 柿原泰）
	野村元成	1996	9/23	第17回シンポジウム サイエンス・コミュニケーション'95
			1/27	MODE2研究会
			3/16	第18回シンポジウム サイエンス・イン・トランジション'96
			3/17	第5回研究発表会（7件）
			7/19～21	夏の学校96 日常生活とSTS（委員長 川崎勝）
			9/28	第19回シンポジウム 新しい科学技術リテラシーを求めて—伝統的世界観と科学技術
	平川秀幸1	1997	12/14	21世紀文化学術財団15周年記念シンポジウム（協賛）科学技術基本計画は科学技術を振興できるか
			3/22	第20回シンポジウム 科学技術時代の処方箋—信じる者は足元をすくわれる！？
			3/23	第6回研究発表会（年会）・総会（8件）
平川秀幸2	1998	7/26～18	夏の学校97（委員長 平川秀幸） 危険社会 RISK SOCIETY あぶない社会 —そのSTS的課題と展望—	
		3/16～22	科学技術と社会に関する国際会議（後援）	
		4/25	第21回シンポジウム STSの未来	
		4/26	第7回研究発表会（年会）・総会（8件）	
		7/18	夏の学校98 STSの未来（委員長 中村征樹）	
		10/31	第22回シンポジウム 医療問題は科学論として語れるか	
中村征樹	1999	3/27	第8回研究発表会（年会）・総会（3件）	
		3/28	第23回シンポジウム グローバル・サイエンス、ナショナル・サイエンス、ローカル・サイエンス	
		7/24～26	夏の学校99 人文社会科学とSTS（委員長 隠岐さや香）	
		7/30	ワークショップ 21世紀の科学技術と日本社会（共催）	
		7/31	スティーブ・フラウ氏講演会 科学の統治 開かれた社会の未来	
		11/13	第24回シンポジウム 工学教育とSTSの可能性	
隠岐さや香1	2000	3/25	第9回研究発表会（年会）・総会（8件）	
		3/26	第25回シンポジウム エネルギー政策をリスク論から考える	
		7/29～31	夏の学校2000 STSによる21世紀の批判的構想（委員長 夏目賢一）	
	夏目賢一	2001	12/28	第26回シンポジウム GMOと科学論・リスク論：現代の科学・技術・社会（STS）論研究
			3/31	第27回シンポジウム 大学独立行政法人化問題とは何か
			4/1	第10回研究発表会（年会）・総会（7件）
夏目賢一	2002	7/28～30	夏の学校2001 生活世界における科学教育（委員長 三村太郎）	
		10/7	科学技術社会論学会設立	
		11/23	第28回シンポジウム 科学技術ジャーナリズムへの期待	
夏目賢一	2002	1/12	東アジアSTSネットワーク国際シンポジウム 東アジアにおける科学・技術と社会	
		3/23	第29回シンポジウム STSから考える市民運動	

結局、国際会議から2年半後の2001年10月にNJとは独立に科学技術社会論学会が設立される。NJは学会化せずに、あくまでNJとして独立に存続することとなる。学会をつくることとNJを残すことは、戦略的なことであったと中島氏は言う。

「STSの制度化・学会化は昔から議論がありました。教育のために教科書を作らなければならない、学生の就職先を作らなきゃいけない、助成金を獲得して研究を推進していかなければならない。しかし、それはNJの役割ではない。だからこそ学会は必要だった。ただNJそのものが学会化してしまうと体制化してしまっ、科学批判や、はちゃめちやな意見というのが出にくくなっちゃう。そうすると、だんだんとつまらなくなってくる。みんなが与党になっちゃうと、その学問は死んでしまう。だからこそ意図的に、野党としてのNJを守っていくべきだと思った。NJには根本に批判的精神があるんです。若い、新しい人たちが集まって、学会ではできないような、よくわからないけれどもおもしろそうな、次の学問につながることを自由にやっていける場がNJなんです」

科学技術社会論学会にはメーリングリストがないのも、これと関係している。情報交換・共有はNJの存在意義であって、それは学会の役割ではない。研究をする場としての学会と、ネットワークとしてのNJの両方を残すことこそ、STSが生きてくるという。

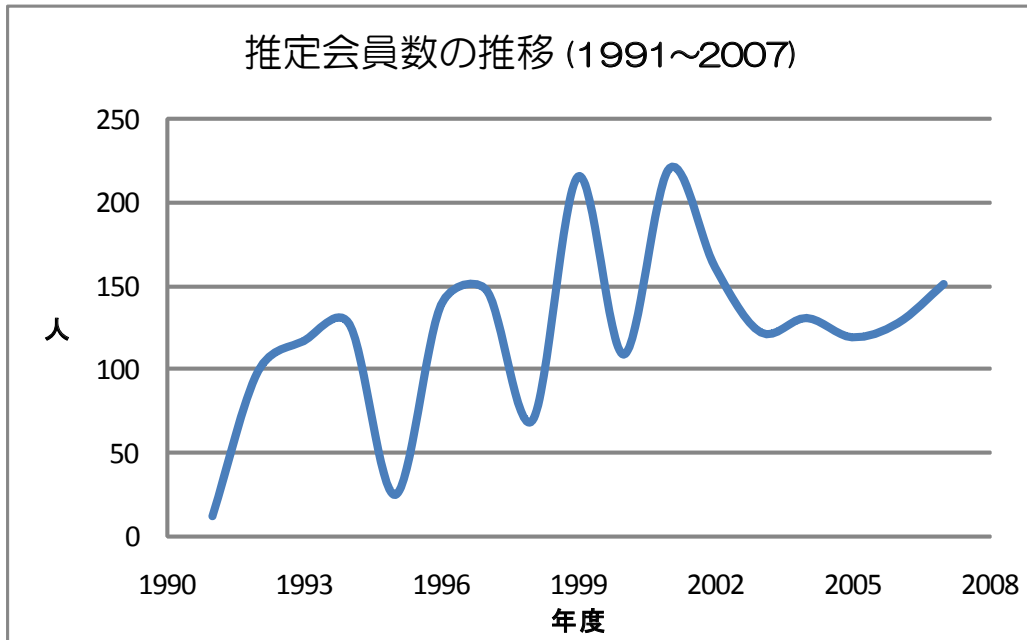
IV期：なんで与党に来るのかなあ（'02～'09）

しかし、学会の与えた影響は予想外に大きかった。まず、学会誌が刊行されることが確実になったことから、NJの機関誌であるイヤーブックの投稿論文掲載制度が02年に廃止された。YearBook'90から'00までの9冊は、25回もの詳細なシンポジウム記録と投稿論文、過去のニューズレターなどを記録として残し、その後のNJの活動はウェブサイトの「最近の情報」「過去の活動」「ニューズレターバックナンバーリスト」から伺い知ることができる。

イベント企画として、年に1回の夏の学校、年に1～2回のシンポジウム、そして年度末の研究会・総会は継続してきた。学会との差異化を図るために、会費を3500円から2000円へ値下げし、勉強会、研究会など小中規模の活動へとシフトする方針となる。例えば、03～04年には定例研究会が、06年にはSTS研究会が、08年からは東工大にてSTS NJ研究会が定期的に開催されている（P. ※参照）。会員数も2001年には推定220人を超したが、ここ数年では100～150の間で安定している。学会に入るからNJはやめるという意見もあった。いかにして活性化するか、というのが2009年現在の課題でもある。

代表	年	月日	テーマ	
三村太郎	2002	3/24	第11回総会・研究発表会（8件）	
		3/24	イヤーブックの投稿論文掲載制度廃止	
		8/16～18	夏の学校2002 理工系大学教育の現在（委員長 重松真由美）	
		12/21	第30回シンポジウム ユニバーサルデザインの可能性	
		3/22	第31回シンポジウム 技能知への視座	
	重松真由美	2003	3/23	第12回総会・研究発表会
			6/1	「公共のための科学技術」合評会のご案内
			8/1～3	夏の学校2003 ノーベル賞にみる科学と社会 （委員長 小山田和仁）
			11/30	<科学史と教育>シンポジウム（後援） 「理科基礎」をめぐる
			12/12	第1回定例研究会 現代社会と科学技術の共進化プロセス解明への視座
			2/26	第2回定例研究会 科学雑誌における 「科学」イメージの生成と変容
			3/20	第32回シンポジウム 大学をどうひらくのか
浅見恵司	2004	3/21	第13回総会・研究発表会	
		5/21	第3回定例研究会 生理休暇の誕生 近代日本の月経と生理休暇要求の言説史	
		7/2	第4回定例研究会 変容する教育・研究システム 「学生あたりコスト」からみた国立大学システム	
		7/30～8/1	夏の学校2004 医療問題とSTS（委員長 土畑重人）	
		10/28	第5回定例研究会 ブラッド・バンキング	
		4/29	第33回シンポジウム カフェ・シアンティ フィークーその現状と可能性—	
		4/30	第14回総会・研究発表会	
		8/26～28	夏の学校2005 「専門家」をどうとらえるか— 「専門家と非専門家」図式の検討を通して— （委員長 藤本卓磨）	
		12/23	第34回シンポジウム 国際問題としての科学・ 技術：貿易交渉、予防原則、地球環境を巡る 科学	
		2006	3/25	第35回シンポジウム 科学技術の人類学への招待

代表	年	月日	テーマ	
柿原泰1	2006	3/26	第15回総会・研究発表会	
		8/5～6	夏の学校2006 生命科学と政策（委員長 田中丹史）	
		8/30	STS研究会 高校教育の現場での科学技術コ ミュニケーション	
		12/3	第36回シンポジウム（共催） 科学的知識の伝達・理解・発見	
		12/11	STS研究会 高校教育の現場での科学技術コ ミュニケーション（第2回）	
	柿原泰2	2007	3/31	第16回総会・研究発表会
			6/22	STS NJ研究会 生命科学研究者は、研究の応用可能性や社会的 課題についてどう考えているのか？
			6/24	第3回政策研究会（後援） AAASとサイエンス・コミュニケーションの 未来（後援）
			6/30	サイエンスカフェ国際会議参加報告会（東京）
			7/8	サイエンスカフェ国際会議参加報告会（京都）
			8/3～5	夏の学校2007「信頼」から考える科学技術と社 会（委員長 江間有沙）
			2/8	STS NJ研究会 ベアード「物のかたちをした知識」を読む
3/22			第37回シンポジウム 薬のリスクを問いたす	
江間有沙	2008	3/23	第17回総会・研究発表会	
		4/4	STS NJ研究会 ベアード「物のかたちをした知識」を読む	
		6/6	STS NJ研究会 ハッキング「何が社会的に構 成されるのか」を読む	
		8/1	STS NJ研究会 ハッキング「表現と介入」を読む	
		8/1～3	夏の学校2008 科学技術とイノベーション（委員長 標葉隆馬）	
		10/3	STS NJ研究会 ハッキング「表現と介入」を読む	
		12/5	STS NJ研究会 ハッキング「表現と介入」を読む	
		1/24	第38回シンポジウム 変遷する「正常」	
		1/30	STS NJ研究会 ハッキング「表現と介入」を読む	
		標葉隆馬	2009	3/28
4/11	STS NJ研究会 トーマス・クーン「科学革命 における本質的緊張」を読む			



各年の総会資料より作成 (収入内会費 / 年会費)
 1995 年は、会費を 2000 円から 3500 円に繰り上げたため、推定人数が極端に少なくなっている。
 98 年と 2000 年の谷の理由は不明。2006 年からの上昇は、会費が 2000 円に値下げされたためと考えられる。

V 期：東アジアとSTS (’10～)

2010 年というのは、日本の STS にとって一つの節目となる年であろう。NJ の 20 周年というのの一つ、そしてもう一つ、科学社会学の国際学会である 4S (Society for Social Studies of Science) が夏に科学技術論学会と合同で開催されるのである。アメリカやヨーロッパの研究者との交流はもちろんであるが、中島氏は今後の日本における STS において、特に東アジアとの関係に注目をしているという。

2007 年に EASTS (East Asian Science, technology and society) が国際雑誌を刊行したように、東アジア圏はここ数十年、STS 研究が開花してきた。イギリス・アメリカで始まった動きが、東アジアでも広がっていったとき、そこにはどのような類似点・相違点が見いだせるのか。また、そこで日本が果たすべき役割とは何であろうか。中島氏は、風土・文化的にも近い東アジア圏との情報の共有が、今後の STS 研究に、新たな活路を見出すだろうと考えている。

NJ は、その中で、今後どのような場やネットワークを構築していくことができるだろうか。今はそれについて、考えていく段階なのであろう。

インタビュー後記

「僕にとって NJ は歴史ではないんだよね」

「私にとって NJ は歴史です」

インタビュー冒頭での中島氏と私のやり取りである。資料を読み込む、年表をつくる、数値データをプロットする。私の知らない NJ を、そのような作業を通して編み上げていくのは、楽しかった。知っている人の名前を初期の資料に見ついたり、大先輩の院生時代の様子を垣間見れたり、案外、問題提起されていることは今も昔も変わらないんだなあと思ったり。それでも資料からは救いとることのできない、当時の熱気、葛藤、そして想いを、中島氏は熱く語ってくださった。野党としての NJ、批判的精神を持った NJ、そんな団体にかかわれたことをとても嬉しく思うと同時に (解散しないでいてくれて本当によかった)、では自分たちはこれからどうしていけばいいのだろうと考える。

20 周年企画が、新たな STS NJ の側面を切り開き、大きなうねりを作り出す元となればいいなあと思っている。

2009 年 5 月 16 日 江間有沙 (2009 年度 事務局長)

STS NETWORK JAPAN で、昔そんなテーマを扱っていたの?!
ニュースレターにはそんな話が掲載されていたの?!
NJ への投稿論文ってどんなものがあったの?
NJ のこと、もっとよく知りたい!
そんな人は、Year Book の '90 ~ '00 をご覧ください!
次のページに、お申し込みのご案内が!
残り部数は限られています!

Yearbook '90~'00 販売のお知らせ

20周年企画の中島氏インタビューを作成するにあたって、参考となったのがYearbook全9巻でした。シンポジウムの詳細な記録（テープ起こし、お疲れ様でした！）、多様性に富んだ投稿論文、そして昔々のニュースレター。文章の間から、当時の様子が伝わってきます。「こんなこと言っちゃっていいの？」「楽しそうだなあ」「大変そうだなあ」「これはおかしいだろう」「昔からこの問題は議論されていたんだ」「こんなものまであったのか！」などなど、1冊1冊に驚きと新しい発見が詰まっています。

各地に散らばっている在庫を確認したところ、年度によりますが、まだいくつか部数が残っていることがわかりました。こんなおもしろいもの、眠らせておくのはもったいない！というわけで、今回、Yearbookのお知らせを改めてさせていただきます。

STSNJができてから20年。その間、何が変わったのでしょうか、何が変わらなかったのでしょうか。NJをずっと知っている人も、NJを最近知った人も、きっとYearbookの中に、いろいろと考えさせてくれるものを見つけられるはずです。この機会に、自分用・研究室用・図書館用などに、揃えてみてはいかがでしょうか？

お申し込み先：STSNJ事務局 メールアドレス：office@stsnj.org

金額：送料込みで1冊500円

6冊以上一括購入ならば、送料込みで3000円

(※ 何巻が欲しいかを明記してください)

注意：年度にもよりますが、在庫がわずかしかないものもありますので、

ご希望に添えない場合もあることをご了解ください。

(92/93号は12部しか在庫がありません)



【内容の一部紹介】

Yearbook '90 (第一号)

シンポジウムの記録

- 第1回 大学における「科学と社会」教育の実践・イギリスにおけるSTS
- 第2回 STSの課題と現実
- 第3回 私のSTS観
- 第4回 日本におけるバイオエシックス・科学技術論の視角
- 第5回 STS教育の現場から
- 第6回 STS研究・教育の国際動向

Yearbook '91/'92 (第二号)

第7回シンポジウム

- 研究開発制度と研究教育制度 村上陽一郎（東京大学）
- 第9回シンポジウム 環境・倫理・教育
- 大野嘉章（練馬区役所）耳を澄ませば私が聞こえる
- 弘睦夫（広島大学）環境問題の問題点
- 鬼頭秀一（山口大学）環境倫理とSTS

Yearbook '92/'93 (第三号)

第8回シンポジウム「科学技術と社会を見る眼」中岡哲郎（大阪市立大学）

- 第10回シンポジウム 科学報道を考える
- 木元俊宏（朝日新聞社）シュレディンガーの猫又
- 牧野賢治（東京理科大学）科学報道30年の経緯
- 若松征男（東大総合文化研究科）STSで捉える科学啓蒙
- 第12回シンポジウム 若者の科学技術離れ
- 小林信一（電気通信大学）若者の科学技術離れに学ぶ
- 岩田弘三（大学入試センター）入試データから見た若者の理工系離れ現象
- 相楽俊憲（福島県立須賀川高校）科学技術離れの背景として考えられるもの
- 原康夫（筑波大学）大学物理教育の視点から
- 第13回シンポジウム STS教育とは 小川正賢（茨城大学）

Yearbook '94 (第四号)

第14回シンポジウム 大学におけるSTS教育

- 「福岡教育大学における実践から」 田中浩朗（福岡教育大学）
- 「STS/ヨウナモンの実践」 川崎勝（山口大学）
- 「大学改革と科学技術基礎論教育」 横山輝雄（南山大学）
- 「社会学とSTS」 牧野賢治（東京理科大学）

第3回STS研究発表
夏の学校の記録

Yearbook '95/'96 (第五号)

投稿論文

- 野村元成 日本の原子力体制と市民——市民排除型原子力体制論試論
- 調麻佐志 大衆メディアと「科学技術」——マンガを手がかりにして
- 第16回シンポジウム ビッグサイエンスとSTS
- 「日本における原子力と市民」野村元成（東京大学大学院）
- 「科学者の社会・政治的行動様式について」綾部広則（東京大学大学院）
- 「加速器を用いた素粒子・原子核・物質の科学」
- 山田作衛（東大原子核研究所）
- 第17回シンポジウム サイエンス・コミュニケーション '95
- 「科学技術を楽しむ権利」小林信一（電気通信大学）
- 「『科学技術と社会のコミュニケーション』と政策イシューのかかわり」
- 長濱元（信州大学）
- 「サイエンス・ボランティア22年の軌跡——子供に聞きたがる話」
- 只野文哉（科学技術と経済の会）

Yearbook '97 (第六号)

投稿論文

- 小林傳司 拡大されたピアレビューの可能性——「コンセンサス会議」の事例
- 綾部広則 専門家／非専門家に関する一つの方法論的試案
- Kim, Chong-Yeal Development of S&T Policy in Korea
- 特集・二十一世紀文化学術財団特別シンポジウム
- 21世紀科学技術の課題——科学技術基本計画は科学技術を振興できるか
- 「科学技術基本計画が書き忘れたもの」村上陽一郎（国際基督教大学教授）
- 「グローバル・コンペティションと日本の科学技術」
- 薬師寺泰蔵（慶応義塾大学教授）
- 「科学をとりまく周辺」落合良（フリー）

Yearbook '98 (第七号)

投稿論文

- 三宅 苞 過程としての研究開発
- 木場隆夫 コンセンサス会議における市民の意見の形成についての考察
- 著者と評者の対話：コンセンサス会議再考
- 木原英逸 自律性の神話：コンセンサス会議から科学技術の公共的支援へ
- 小林傳司氏の問題提起に応えて
- 小林傳司 科学研究と公共性をめぐって：木原論文へのコメント

Yearbook '99 (第八号)

投稿論文

- 柄本三代子 科学的リアリズムを支える素人たち
- 加藤源太郎 リスク制御に対する社会システム論的考察
- 第22回シンポジウム
- 医療問題は科学論として語れるか
- 佐藤純一（宮城大学）蔵田伸雄（三重大学）立岩真也（信州大学）
- 松山圭子（青森公立大学）小林傳司（南山大学）
- 第23回シンポジウム
- グローバルサイエンス、ナショナルサイエンス、ローカルサイエンス
- 春日匠（京都大学）隅藏康一（東京大学）橋本毅彦（東京大学）
- 鬼頭秀一（東京農工大学）平川秀幸（国際基督教大学）

Yearbook '00 (第九号)

投稿論文

- 殷登祥 STS IN CHINA
- 水沢光 1970年代における日本型テクノロジー・アセスメントの形成と停滞
- 通産省工業技術院の取り組みを中心に
- 第24回シンポジウム
- 工学教育改革とSTSの可能性
- 札野順氏（金沢工業大学）柴田清氏（新日本製鐵）
- 木原英逸氏（国士舘大学）
- 第25回シンポジウム
- エネルギー政策をリスク論から考える
- JCO臨界事故の再検証と「不安」の評価—
- 飯田哲也氏（(株)日本総合研究所）池田三郎氏（筑波大学）
- 林衛氏（岩波書店『科学』編集部）浅見恵司（東京工業大学）
- 重松真由美（東京工業大学）平川秀幸（国際基督教大学）
- 野村元就（信州大学）

シンポジウム・研究会テーマ募集のお知らせ

STS Network Japan は 2010 年 3 月に 20 周年を迎えます。年表を見ても、さまざまな観点からのシンポジウム・研究会が意欲的に行われてきた様子が行えます。それは、その時に世の中で話題になっていたテーマであったり、最先端の研究の紹介であったり、企画委員の想いが込められていたものであったりと、実に多様です。初期の「STS とは何だろうか」という半ば混沌としていた状況から 20 年の歳月が流れた今、STS を取り巻く環境は大幅に変わりました。STS について議論するコミュニティは NJ 以外にも次々と創設されてきました。公的な場としての学会もでき、さらには手法や分野に特化したテーマの研究も各地で開催されています。

しかし、今だからこそ、そして STS Network Japan だからこそ取り組めるテーマというのがあるのではないのでしょうか。たとえば、今年の夏の学校のテーマは「科学技術コミュニケーション再考」です。科学技術コミュニケーションが広まることは非常に喜ばしいことですが、その一方で、「科学技術コミュニケーションは良いものだ」と無批判に推進していくことは危うさを伴います。その意義を認め、より良くしていきたいからこそ、批判的に現状を振り返り問題と今後の方向性を提起していくことが求められています。

STS Network Japan は、20 周年という 1 つの区切りの年を迎えるにあたって、STS の現状を批判的に見つめ直し、新しい枠組みを提供していけるような場を提供していきたいと考えています。「何か腑に落ちない」「STS のここが疑問だ」「立場の違うあの人とあの人を討論させたらどうなるのか」「そもそもこのテーマは STS で扱えるのか」など、ちょっとした疑問やコメント、思いつきにヒントが隠されているかもしれません。

そこで、STS Network Japan を昔からよく知っているからこそ言えること、まだよく知らないから言えることなどを幅広く募集いたします。テーマはニューズレターにある中島先生へのインタビュー中から拾ってきても（年表の中のテーマや東アジアネットワーク構築など）、あるいはインタビューに反論する形での「私の STS 観」でも、普段から温めてきているテーマであっても構いません。頂いたテーマの中には、STS Network Japan 全体として議論すべきもの、そして STS Network Japan の役割として期待されるものが含まれていると思います（但し、複数の応募の中から類似したテーマについては、事務局側が類型化した形で扱わせていただくこともあります）。また、応募には STSNJ 会員の有無は問いませんが、そのテーマで STS Network Japan 事務局がシンポジウム・研究会を開催することになった場合、企画コンセプトについて積極的に係わっていただきたく思います。

第一次締め切りは、2010 年 3 月の STS Network Japan 春のシンポジウムを見据え（場合によっては、春のシンポ以外の場所での開催も有り得ることをご了解ください）、**9月1日**といたします。応募される方は、下記フォームを参考に事務局までお申し込みください。皆様のご応募をお待ちしております。

-----STS Network Japan テーマ申込フォーム -----

氏名（フリガナ）：

所属先：

E-mail アドレス：

シンポジウム・研究会テーマタイトル：

内容：

（最低 400 字～800 字程度で、企画コンセプトを書いてください。登壇希望者などがある場合は、具体的な名前を記入してください。また、シンポジウム・研究会の形式なども特定したい場合はご記入ください）

問い合わせ先：STS Network Japan 事務局（E-mail: office@stsnj.org）

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-16 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 平川研究室気付

変遷する「正常」 参加報告記録

報告者 標葉隆馬

【シンポジウム概要】

近年、科学技術が体や心の様々な機能に介入する可能性を高めるなか、治療を超えて肉体的・知的能力を増強するようなかたちでの身体への関与（エンハンスメント）にまつわる問題が取りあげられるようになり、科学技術が脳へと介入していくことの持つ意味が議論されるようになった。そのような中で、科学技術の急激な進歩が、我々の心や体における《正常》という概念に大きな変化を与えようとしており、《正常》な身体・精神という前提自体が揺らいでいる点に注目しつつ、変遷する「正常」という概念そのものに対してどう議論をしていくか、そして学界や研究者集団、さらには社会がどのようにそれらの課題に向き合うことが必要であるかという議論する必要が考えられた。そこで、STS Network Japan 2008 年度冬のシンポジウムでは、現代社会で揺らぐ《正常》の概念を、医療人類学や脳科学、医療社会学などの多角的な視点から検討することがテーマとされた。

シンポジウムは京都大学芝蘭会館別館研修室2（京都府京都市左京区）を会場に行われ、当日の参加人数は登壇者を含め23人であった。

発表のプログラムは以下の通りであった。

池田光穂 氏

（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）

演題「狂気を装う：〈異常〉の権利を社会はどのようにして保全していくのか？」

土屋敦 氏

（東京大学大学院 人文社会系研究科 グローバル

COE プログラム「死生学の展開と組織化」）

演題「エンハンスメント論争における“ability”概念と「医療化論」の視点」

美馬達哉 氏（京都大学大学院医学研究科）

演題「脳は増強できるか」

また、シンポジウムは、京都大学大学院の東島仁氏の司会で行われ（企画・運営についても東島氏によるものであった）、コメンテーターを大阪大学の中村征樹氏が務めた。

尚、当日の議論において使用された言葉の一部については、日常会話においては差別的に捉えられる場合があるものも含まれていた。しかし、本報告ではそのような言葉についても、敢えて表現を変えずに用いることにした。その場の議論をできる限り汲み取った報告にするためである。もちろん、当日の会場の議論において、そのような言葉は差別的な意味合いをこめて使われたのではなく、あくまで議論における問題点を指し示す意図で用いられたことを先に強調したい。

【講演】

最初の登壇者は池田氏であった。池田氏は、はじめに医療人類学が文化人類学的手法・理論を用いて医療を考えるものであるとし、文化をキーワードとしている点に言及した。池田氏によれば、その医療人類学の観点から変遷する「正常」を考えたと、「偽装」問題を想起されたという。そして、臨床コミュニケーションの観点から見たとき、「偽装」するということとはどのように見えてくるのかという問題提起がなされた。そして、精神医学分野の研究を踏まえつつ、狂気の偽装についての考察が行われた。具体的な例示としては、ドイツの詩人ヘルダーリンの狂気は「偽装」であるというベルトーの指摘や木村敏氏の著作、また1973年 Science のローゼンハンの論文（狂っている振りをして入院し、入院後は狂気の偽装をやめた場合でも、閉鎖病棟への拘禁は長期に及ぶというもの）などへの言及がなされている。以上の例から、池田氏は、「狂気」というスティグマ、「狂気」の診断の持つ社会的効果を指摘する。そして、二種類の狂気として、定義不能な野生の狂気（狂人）と飼いならされた狂気（精神病）が指摘され、現代においては後者の狂気である精神病をどのようにコントロールしていくのかという方向で進んでいるとする考察が示された。現代においては、狂気をスティグマタイズされるリスクを回避する必要があり、そのために「狂気」にスティグマされない処世術が要求される。このことはいわばマイルドな思想統制の側面を持ちうるということが池田氏の問題提起であった。一部の狂気をいわば個性として保障・保全しうるのかという点、そして更には、現代の正常中心主義（正常から異常が定義される）によって「正常」と「狂気」の境界を定める図式の限界を超えた議論を行うことは、正常という概念自体が揺らいでいる現代だからこそ考えなければならない問いであるようにも思える。

二人目の登壇者は、土屋氏であった。土屋氏からは、①遺伝学的エンハンスメントと優生学、②エンハンスメント論の「極北」、③“ability”をめぐる科学技術決定論と社会決定論（社会構成主義）、④社会意識調査、と4つの話題が提供された。

土屋氏の発表ではまず遺伝子改変により能力増強がなされたスーパーマウスの紹介から始まった。スーパーマウスについての話題提供を通して、このような研究が例えば筋ジストロフィー治療等への応用できる可能性がある点、一方でそれらの知見が治療以上の能力増強に対する想像力を掻き立てる点が言及された。「治療」と「能力増強」の対立構造である。そこには同時に、科学技術の進歩に伴い、疾患（障害）と呼ばれる領域が変化しうること、そして「医療化論」／「脱医療化

論」との対立構造があることが指摘された。これは、同時に「エンハンスメント問題」と「優生問題」に関わる問題図式の指摘でもあった。

次に、オックスフォードを拠点とする、世界超人協会という人に対するエンハンスメント推進論を最もラディカルに展開している団体と、その思想の内容についての第三者の立場からの紹介・検討がなされた。

続いて、科学技術決定論と社会決定論について指摘がなされた。そこでは、何かができること（Ability）と何かができないこと（Disability）をめぐる古典的議論の図式が提示から始まり、「医療モデル（生物学的モデル）」／「社会モデル」（例：着床前診断の是非）へと議論が展開していった。その中で、超人運動は極端な科学技術決定論と見ることが出来ること、「正常性」や「優良」といった概念の社会構築性、「医療化論」と治療の領域拡大などの点が指摘された。その後、エンハンスメントに対する意識調査についての結果と分析が紹介された。

三人目の登壇者は美馬氏であった。美馬氏の話題テーマは「脳は増強できるか？」というものであった。発表ではまず、脳科学の持つ説得力と脳ドーピング、脳への電磁気刺激の現状とエンハンスの問題、ニューロエシックスといったキーワードから始められた。そして、スマートドラッグ（集中力増強など脳機能増強のための薬物使用）として薬物（薬品）を使用した経験に関して、2008年のNature誌に掲載された調査の概要が紹介された（但し、その調査の方法論的課題についての言及もあったが、ここではその内容は割愛する）。それらの導入を通じて、薬品使用における、「治療として使用するか？」／「能力増強として使用するか？」という図式が提示されたと言える。

続いて、美馬氏は小説「アルジャーノンに花束を」を例として取り上げ、エンハンス問題について考察を展開した。そこでは、医学的な副作用や有害性の評価の問題、個人の主観性やアイデンティティの問題、脳科学に対する社会的意識や価値観の問題が指摘され、「従来の生命倫理や医療倫理で十分か？」という問題意識が提示された。

続いての話題提供は、脳電気刺激についてであった。ここでは、本来は治療目的であるが、一方で集中力が増す、流暢に話すことができるようになる場合があるという経頭直流電流刺激（TDCS）の機械を実際に用いた実験が美馬氏本人を被験者として行われた。このパフォーマンスは、非常にユニーク且つ分かりやすいものであり、美馬氏本人の弁をお借りすれば、実践の脳科学とも言える実験であった。聴衆の目と耳をひきつけたことは言うまでもない。この話題導入により、話題は直流刺激による認知能力のチャージ可能性について展開された。そこでは、心理学との境界領域、ゲーム理論の応用として最後通牒ゲームが紹介された。この最後通牒ゲームは感情と理性は脳の別の場所にあることを示すことを目的としたゲームである。そこでは、TDCSによって寛容になるという傾向（最後通牒ゲ

ームでの条件受け入れ範囲拡大）が見られるという知見が紹介された。

以上の話題提供から、美馬氏は以下のような問題提起を行ったといえる。それは、端的に言えば、薬品にせよ脳電磁気刺激にせよ、そこには治療かエンハンスメントかという図式が存在し、また治療とエンハンスメントの境界は曖昧であるということである。治療であれば、適切にインフォームドコンセントが行われ、本人の承諾があれば基本的に問題は少なくなる。一方で、エンハンスメントは本来必要の無いものであり、リスクの問題が関わってくる。その一方で、医療的制約がないので個人の責任の名の下に自由でも良いという言い方も存在するという問題も孕んでいる。後者の懸念において、エンハンスメントはアチーブメントの話題と関わってくる。つまり、「努力なしでの成果（gain without pain）」をどのように捉えるかという問題とも関わるテーマである。また、より優れた（ないしは正常な）人間に対する素朴な信仰への疑問が提示され、それに関わる倫理的問題の例として幼児の内耳インプラントの話が取り上げられた。耳が聞こえることが良いことだとして（その判断は大人の持つある種の信仰である）、自己決定権の無い幼児に内耳インプラントを実質的に強制することの倫理的問題が指摘された。

池田氏、土屋氏、美馬氏の話題提供を受けて、コメンテーターである中村氏からのコメントが行われた。そこでは、まず「正常とは何か？」、正常の残余としての「異常」というテーマと、池田氏の発表のポイントであった「異常であることの権利の保障」、「完璧な社会（マジメ）を求めることの放棄」についての言及がなされた。その後、治療とエンハンスメントの違いに関連した観点から、「障害」を全否定しない態度についてのテーマ提起が行われた。「病気→正常→より優れた資質・能力」（病気から正常：治療、正常から優れた：エンハンスメント）という線形モデルの問題、正常の相対化と「正常」像の文化的・社会的位相をみるという観点が指摘され、障害者自身の声をどのように拾い上げていくかという課題が提示された。また、障害者解放運動の団体である「全国青い芝の会」の行動要領にも言及が行われた。そして、講演者へ「正常は揺らいでいるのか？強化されているのか？あるいは・・・？」との問いかけが行われた。

【総合討論】

中村氏のコメントを受けて、総合討論に入ることとなった。最初の発言は池田氏のものであった。池田氏は、中村氏の「青い芝の会」への言及を受け、「青い芝の会」が何故テロルの方向に行かなかったのかという点への注意を促した。社会の持つ正常と異常の観点について、そういうオプションがどうして抑圧されたのか、「青い芝の会」のようなラディカルな発想の中にも、何かしらピュアな理念のようなものが内包されていた可能性があったのではないかという疑問の提示であった。

続いて美馬氏より、4割が肥満と診断されるような肥満検査の規準を例に取り上げ、正常・正規（ノーマル）という概念の射程がひどく狭くなっているのではないかという疑問が提示された。

土屋氏からは、正常性自体が一つの社会規範であるという指摘がなされた。正常を維持するために大量の資本が投入され、マーケットが開拓されている状況を踏まえ、そのダイナミクスを調査・分析することが社会学者に要求されているのではないかと問題提起がなされた。加えて、正常というものを巡って、（普段は不平等にも無視されているような）悲鳴を拾っていく作業が必要であると指摘がなされ、そのような悲鳴をどのように拾い上げ、生かしていくのかという課題が提示された。

その後、会場との質疑応答に入ることとなった。最初の質問は、「エンハンスメントの極北を支えている倫理とは何か？」というものであった。その質問の背景として、極端な形のリベラリズム（⇒コミュニズム）の図式が言及され、「共同体主義的なエンハンスメントが成立しうるのか?」、「色々なリベラリズムの立場に対してどうなのだろうか?」、そして「正義論的に見て（そのようなエンハンスメントは）どうなのか?」という質問が投げかけられた。それらの疑問に回答して、土屋氏は発表の内にリベラリズムに関する基礎的な部分の考察が抜けている点を認め、またその問題点を自覚していることに言及した。また、コミュニズムは、一つの歯止めの論理として活動できる可能性があり、ロールズの正義論を用いてエンハンスメントを議論している例（肯定・否定）もあることを答えた。加えて美馬氏が発言し、科学的には、「選択しているということは科学者に踊らされているのではないか?」という疑問が提示され、それゆえにエンハンスメントはリパティだとは思えないとする見解が提示された。

続いての質問は、「エンハンスメントの選択がリパティだとは思わないが、エンハンスメントをしたい人はしても良いのだろうか?また、検診類が推進されているのをどう思うか?」というものであった。この質疑に対しては、美馬氏が、検診類の推進が科学による観点を強化する側面があり、個人的にはあまりよくないのではないかと考えていることを伝えた。しかし、その一方で乳癌検診のように有用性を持つものもあり、判断が難しい点についての言及もなされた。

続いてのフロアーからの質問は、「内耳インプラント、マイノリティの廃絶について、当事者からの反対の原因はなんでしょうか?」というものであった。それに対し、まずは池田氏から発言がなされ、「科学技術、科学の能力は科学者の独占物であるのか?」という問題の提示がなされた。科学技術における不均等な配分を管理しているのが科学者を始めとする専門家であるという指摘であり、科学論研究者はこの点について考える必要があることが指摘された。また、そのような問題においては専門家と素人の区別がなされているが、エンハンスメントの問題ではその境界が十分に維持で

きないという課題も指摘された。また、池田氏は内耳インプラントの例について、自己決定権の無いこどもに対して、社会および親の行動規範を押しつけているという形で、ある意味で感情を逆撫でするということを隠し味にして議論している点を指摘し、その部分について自覚の必要性を訴えた。続いて美馬氏が発言し、「青い芝の会」の例でも、内耳インプラントの例と同じような構造があるのではないかと指摘を行った。ここでは、内耳インプラント向けのトレーニングを行っても、状況によっては難聴が改善されず且つ手話も出来ないという場合もあり、そうである場合には内耳インプラントをするよりも手話をきちんと習得するほうが好ましい場合もありうるということが指摘された。これに回答する形で中村氏が発言し、障害があることもアイデンティティでありうること、障害機能の回復がアイデンティティの否定につながってしまう可能性があるという「青い芝の会」の主張について言及した。

この一連の議論に連なる形で、「内耳インプラントの技術が調子良かったらそれで良いのか?耳が悪いという価値判断へのアンチテーゼもある。価値観を共有していない人とどう付き合うかという問題（社会学的問題）。ニューロエシックスというよりも、バイオエシックスの範囲では?」とする指摘が寄せられた。この指摘に対しパネリストは同意を示している。

続いて「メタボ検診について、エンハンスメントと治療の境目が曖昧になる点について」のコメントがフロアーからなされた。それに対しては土屋氏が、メタボ検診については多様な裏の論理があり、大きく言って医療化の問題があると指摘した。また、エンハンスメントが社会的に普及される局面を想像する場合、一種の規範化というプロセスを踏むのではないかという見解を示した。また美馬氏が土屋氏の見解に同意を示し、医療化の拡大が生じているとの認識を提示した。

次なる質問は、「エンハンスメントであったものが、治療であると言われた瞬間に、良いものであると文脈が置き換わられてしまっていると思うのだが、その点はどうか?」というものであった。その質問に対して、池田氏がエンハンスメントとトリートメントの境界が曖昧になっている状況があるという認識を示した上で、不具という性質がポジティブなエンハンスメントになる可能性も考慮する必要があると指摘した。加えて土屋氏により、医療というターム自体が持つイデオロギー性、「治す」ということの規範性が指摘された。そういうイデオロギーを見つめる必要があるとする指摘である。また、一方で、イデオロギー（同時に医療化）によって生かされているという側面もある点にも留意した考慮をする必要があると指摘した。

【全体の議論を通じて】

全体の議論を通じて、以下の問題意識が明確に提示されたと言える。

- ・科学技術の発展に伴い変遷する「正常」という概念の境界設定をどのように考えるのか

・そもそも境界設定をすること自体が適切であるのか
(そのような境界設定はマイノリティの抑圧につながりうる危険性を認識する必要がある)

・エンハンスメントと治療との境界にある広いグレーゾーンをどのように扱うのか

そのような問題意識に対して STS はどのようなアプローチを取ることが出来るだろうか。一つは、STS 研究の特徴でもあるアクターを追うという方向性にあると考えられるだろう。アクターを追い、その議論や関係性、文脈を丁寧に記述することで、「治療」と「エンハンスメント」の間における境界設定の議論や、医療化の過程における深い分析が可能になると考えられる。また、特に医療化の過程に関する記述を通じては、「正常」を巡る資本や言説のダイナミクスの検討が可能になり、そのことが STS に求められているとも考えられる。

医療化の過程は検査の有用性と拡大に関係していると考えられる。検査の有用性と拡大が、科学の権威強化、医療化による正常の揺らぎと異常とされる範囲の拡大に関係しているという点は、シンポジウム中にも指摘された点でもある。正常の揺らぎと科学の権威強化についての関係性の詳細は、まさしく STS 研究者が注目すべき課題であるように思える。また、そのような医療化の過程、「治療」と「エンハンスメント」をめぐる議論の調査・分析においては、通常は意識されないような声無き声のナラティブをどのように拾い上げていくかという点も重要な観点であるだろう。

最後に、このような意義深いシンポジウムを企画・運営して下さった東島氏に感謝を記し、参加報告とする。

I LOVE YOU から はじめよう!

STS の目的 人類の智慧の完成 <波羅蜜>

前島 修 (広島市長(候補者))

本論文は、2009 年がチャールズ・ロバート・ダーウィンの生誕 200 年であることと、1859 年の著書『種の起源』から 150 年という人類史における節目の年であることから、時代認識として正しい理解を共有する目的で「インテリジェント・デザイン」についての小生の見解を発表するものです。

詳細は、この URL (<http://ousamaosamu.hp.infoseek.co.jp/sts.htm>) を御覧ください。

漢字は <表意文字> であることから、丁寧に一読されれば、日本語が読める人なら誰でも理解出来るように工夫を凝らして平易に解説させて頂いております。 者の前提にそもそもどのようなズレが存在しているのかを明らかにすることが重要な意味を持つ。

論旨としては、まず、『宇宙図』(2007 年 3 月 27 日第 1 版発行 監修: 文部科学省、(社) 日本天文学会 天文教材委員会)の立場を、時代錯誤であり非常識としています。具体的には、

“宇宙が生まれたから元素が生まれた。そこから人間が生まれ、そして科学が生まれた。”
と見る <唯物観> の否定です。

正しい時代の常識は「精神世界」が「物質世界」を創り出したとする <宇宙原初論> です。

我々自身が宇宙を創り出したエネルギーそのものなのであり、エネルギーの塊が自ら分かれた「半霊半物質」の自分の存在を自己証明とする「人間原理宇宙論」なのです。

ゴーギャンの絵画に代表される人類共通の問い掛け

<我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか >

の答えを知った <宇宙の現在>、<地球生命体 ガイア> のひとつの細胞としての「地球市民」の立場を認めることで、「世界連邦」への途(みち)が拓かれてくることが予見されます。

「火の玉地球」「海の惑星」「大陸の惑星」「生命の惑星」「文明の惑星」という地球史における <宇宙の現在> の「文明の惑星」の新たな文明の始まりとは、人類の新しい生活環境の創造にほかなりません。

新しい生活環境への移行には、「所有」から「共用」への価値観の転換が、「拝金社会」から「拝命社会」への実現を加速させるうえでの重要なテコの働きとなり、輸入大国ニッポンが過去のものになるにつれて、「地産地消費」とも言える 21 世紀の「農林水産業」と「観光業」が基幹産業にならざるを得ない 21 世紀地球社会の到来なのです。

自然の摂理に従った <愛の循環社会> は、現在、世界が直面している資本主義経済崩壊の過程にある生活恐慌からの唯一の再建築として、“ワールド・ピース・ヒロシマ” 地球再生(ユニアース)プロジェクトがあるものと御理解頂けましたら幸いです。

I LOVE YOU の YOU が“お金”であってはいけません。

なぜなら、お金の流れ自体が <愛> を源とするものだからです。

あなたにとっての愛するもの I LOVE YOU の YOU は何ですか?

「南無阿彌陀仏」は、サンスクリット語を漢字に置き換えられたものですので、日本人には本来の意味が伝わりにくいと判断されてきました。そこで、<循環><フラクタル><共生> を隠喩した

<いつも みんな なかよし >

を <森羅万象> を現す言霊(ことたま)として広報しています。

「此岸(わたし)」から「彼岸(あなた)」に伝わる愛言葉 <いつも みんな なかよし> を彼岸に到る <波羅蜜(はらみつ)> の愛言葉として贈ります。

柏原東ジュニア・サイエンス・カフェに取り組んで

平井 俊男（大阪府立柏原東高校）

1 はじめに

著者の前任校である柏原東高校理科クラブは、大阪大学コミュニケーションデザイン・センターと協同で、2007年2月10日に第1回、その後2009年2月21日に第5回柏原東ジュニア・サイエンス・カフェを柏原東高校において実施した。高校生による高校生のためのサイエンス・カフェとして日本で初めてのとりくみであったので、ここでそれらをふりかえる。

2 とりくみの目的

柏原東ジュニア・サイエンス・カフェの運営主体は理科クラブで、主顧問の著者が教師コーディネーターとして大阪大学などの連絡役をした。柏原東高校は理科系選択コースがなく、卒業生の進路は就職と専門学校などを含む進学がほぼ半々の、創立30年の歴史の新しい普通科高校である。

そのことを踏まえて、今回のとりくみは科学の普及・啓蒙を目的とせず、生徒が将来科学の専門家にならなくても、一市民として科学の問題にかかわっていける（社会人として、意思決定できる）資質の育成を目的としている。つまり、素人であってもわからないことや疑問に思うことは専門家に質問できるように自分の意見を言う訓練の場と、そうすることで自分に自信をつける場とすることをねらっている。

3 とりくんだ内容と気づいたこと

テーマと参加人数（著者と大阪大学のスタッフ、計2名を含む）などを表にまとめる。

回数	実施年月日	「テーマ」 専門家（所属など）	参加人数 （生徒数）
1	2007年02月10日（土）	「携帯電話って無害？有害？」 上田昌文（NPO法人 市民科学研究室）	約20（9）
2	2007年06月09日（土）	「食品について：食品添加物を中心に」 専門家2名 （管理栄養士&消費生活アドバイザー、消費生活アドバイザー）	約15（10）
3	2007年11月17日（土）	「食品リスクをはかる」 平川秀幸（大阪大学 准教授）	約20（8）
4	2008年02月23日（土）	「食品リスクをはかる 2」 神里達博（東京大学 特任准教授）	約10（6）
5	2008年02月21日（土）	「ナノテクってなんだろう？ 生活に入り込む先端技術」 藤田康元（東京電機大学 非常勤講師）	約4（2）

第1回は日本で初めての試みということで、理科クラブの生徒もかなり緊張していた。前半は主に大人からの発言が目立ったが、後半は生徒も発言をはじめ、話がはずんだ。驚いたことに北海道からも参加があった。第2回は中学生の参加があったが、発言はなかった。第3回は保護者と他校生の参加があった。他校生の発言に柏原東高校の生徒もかなり刺激されたようであった。質問に専門家がきちんと答えようとして熱が入り一部講義になってしまったが、生徒は熱心にきいていた。第4回は他校生と市民の参加があった。食品偽装や健康を扱ったやらせのテレビ番組の問題が話題になっていたので生徒は気軽に質問し、ついには専門家にプライベートなことまできいていた。第5回については参加予定の生徒が当日来られなくなり、生徒の参加は過去最低の2人のみであった。そのため、いつも使用していた1階の講義室から4階の準備室に会場を変更した。その結果、専門家と距離が近くなりこぢんまりとくつろいだ雰囲気、テーマそれ自体は最先端で程度が高かったにもかかわらず話が今まで以上に進んだ。

4 まとめ

どうぞ遠慮なく専門家に自由に質問して下さいと言われても、高校生がすんなり発言できないことが事実としてまず確認できた。次に、第5回の参加人数が少なかったことから、多人数よりは数人の少人数で専門家を身近に囲むほうが生徒はくつろいで話のできることがわかった。そのためには円卓を囲んでとまではいかなくとも、それに近い会場が望ましいように思われる。

理科クラブの生徒は、ジュニア・サイエンス・カフェに複数回参加することで公の場で発言する訓練を積み、さらに自分に自信を持てた。実際、これらの経験を生かして全国大会等に参加し、発言・発表している。

ジュニア・サイエンス・カフェのとりくみは成果をあげたと思われる。

学生によるサイエンスカフェの実践とその教育的意義 — Scientthrough の活動を事例として —

中川 威 (大阪大学)、 中津壮人 (大阪大学)、 飯島玲生 (大阪大学)

1. はじめに

近年、研究成果を社会に還元するアウトリーチ活動が研究者に求められつつある。しかし、現在の大学院教育では、大学院生によるアウトリーチ活動の機会は少ない。大学院においてアウトリーチ活動に関連する教育プログラムが設置することは、大学院生のみならず、科学と社会との良い関係を築く上で重要な取り組みだと考えられる。

本発表では、学生によるサイエンスカフェの実践を報告し、その教育的意義について考察する。

2. 実践報告

2.1 Scientthrough とは

大阪大学の多様な学部・研究科に所属する大学生・大学院生から成る企画団体。

[参考 URL : <http://scientthrough.qee.jp/>]

2.2 企画の概要

[日時] : 2009 年 3 月 8 日 [日] 13:30-16:30

[会場] : アートエリア B1 (京阪電車中之島線「なにわ橋駅」地下 1F コンコース)

[参加者] : 16 名 (男性 11 名, 女性 4 名, 不明 1 名 : 平均年齢 40.4 歳, 年齢範囲 21-86 歳)

[講師] : 自主的に参加した大学院生 6 名 (修士課程 4 名, 博士課程 2 名). 研究科は薬学 1 名, 経済学 1 名, 情報科学 1 名, 生命機能 3 名であった。

2.3 企画の構成

[第 1 部] : 講師が 10 分ずつ研究発表を行った。発表後、3 分の質疑応答の時間が設けられた。なお、当日までに講師が発表を練習する機会を設け、他の講師や企画者が内容を確認した。

[第 2 部] : パネルディスカッションを 30 分行った。質問は参加者から受け付けた。

[第 3 部] : 第 1 部で用いた発表資料を印刷し、ポスター発表を 30 分行った。参加者は講師に自由に質問することができた。

2.4 企画の評価

本企画終了後、講師にインタビューを行い、参加者に自記式質問紙への回答を求めた。

[講師] : 研究者ではなく「一般の人」に研究成果を還元することを肯定的に捉え、わかりやすく説明するよう努めていた。また、異分野の研究との共同に意義を見出した。

[参加者] : 大学院生にも研究者と同様に説明責任を求めた。また、応用研究だけでなく、基礎研究の知見を還元することに意義を見出した。

3. 考察

3.1 学生によるサイエンスカフェの教育的意義

経済学以外の大学院生は「一般の人」に研究成果を説明する機会がほとんどなく、本企画を通してアウトリーチ活動で求められるスキルや知識を得たと言える。また、参加者は応用研究だけでなく基礎研究に対する理解を示したと言える。

3.2 課題と展望

実践の課題として、活動の継続性、講師及び企画者の募集方法、広報、情報の発信が挙げられる。情報の発信については、講師の同意を得た後、映像を配信したい。また、異分野の研究との共同や基礎研究の発表の意義を明確にする必要があるだろう。

研究の課題として、サイエンスカフェの、大学院生に対する教育効果の評価が挙げられる。サイエンスカフェにおいて生じる相互作用やそれを通じた認知や行動の変化を研究対象とするため、心理学・社会学等を含めた学際的アプローチが求められるだろう。

今後、サイエンスカフェの教育効果に関する知見を蓄積することで、より効果的な実践を展開し、大学院教育に資する教育プログラムを提案したい。[本企画の実施にあたり、大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの協力を得た]

必要なのは知識なのか？

—日本の大学生における遺伝とゲノム変異に関する 基礎知識調査からの問題提起—

東島仁 (京都大学)

生命科学技術の急速な進歩は、人間を含む様々な生き物をつかさどる遺伝的な仕組みを解きほぐそうとしている。だが、予防医学や再生医療などを通じて社会に大きく貢献する反面、生命科学技術から倫理・社会的な課題が生じる可能性も懸念されるようになった。とりわけ危惧されているのが、既存の価値観が、誤った形で社会的に再構成されることである (1, 2)。

遺伝子変異とは、遺伝情報上における差異である。現行の生命科学研究は、遺伝子変異の有無や、遺伝子変異と人間の特性、あるいは疾患との関係に焦点を当てて進められることが多い。つまり、この概念を正しく理解しているかどうかは、人間の遺伝的な仕組みに関する情報を理解する過程において、より具体的には疾患の予防や治療を始めとする人生の様々な場面における選択において、とても重要な役割を果たす。遺伝子変異という概念が、特定の疾患の「罹りやすさ」が、子孫に伝わるのかどうか、あるいは、なぜある人は疾患に「罹りやすい」のか、などの様々な問題に対する解の一端を担うと言ってもよいだろう。だが、そのように基本的かつ重要な概念であるにもかかわらず、現行の日本の生物学教育の体系では、「人間」と遺伝子変異との関係は重視されていない。

そこで発表者は、現代日本における遺伝子変異の知識水準を測定することを試みた。ただし問題の難易度が高いことが予想されるため、対象は、高等教育を受けた直後の層である大学生（生命科学を勉強した層は除く）とした。測定には、先行研究から作成した質問紙を用いた。本質問紙は、人間の遺伝子変異に関する項目と、現行の生物学教育体系に含まれている（はずの）基本的な遺伝の知識に関する項目からなっていた。合わせて、高校時代における生物履修の有無、年齢や性別、所属学部などを調査し、相互の関連性を検討した。調査期間は 2008 年 5 月～2008 年 12 月、9 つの大学の 21 の学部の学生を対象に行った。最終的な回答者は 724 人、平均年齢は 19.6 歳、文系学部と理系学部には所属する比率は 3:4 だった。結果の詳細には触れないが、正答率は 30%代から 90%代まで大きくばらついた。また、それぞれの学生の正答率には、現在所属する学部が理系（基礎工・医学・薬・理学部など）か文系（現代社会・文・外国語・法・人間科学部など）かという点が大きく影響しており、全体として文系学部の正答率が高かった。大学入試時の選択科目が、正答率に影響していることが示唆される。

本発表では、これらの結果を元に、科学活動の担い手としての研究者集団は、社会全体の遺伝子変異の知識の習得を目指すだけでよいのか、それらの知識を基盤とする価値観の形成にどのように向き合うべきかという点について論を展開した。

1. Medicine, Health Care & Philosophy, 10, Pp417-431, 2007.
2. Nature Genetics Supplement, 36(11), PpS8-S12, 2004.

ユビキタスネットワーク社会と子供の安全・安心

—保護者に対する意識調査分析から

江間 有沙 (東京大学)

総務省は国家の情報戦略である「u-Japan 戦略」において、「いつでも、どこでも、誰でも、何でもネットワークにつながる社会」の実現を目指している。そのカギとなる技術とされているのが IC タグであり、個人の位置・状態情報の取得をする端末として様々な実証実験が行われている。特に、子供の位置情報を把握する登下校通知システムは 2004 年に実証実験が行われてから、さまざまな学校や地域で受け入れられ、かなりの市場規模となってきている。しかし一方で、子供のプライバシー侵害の問題や、情報漏洩・セキュリティ不備などの技術的な課題も懸念されている。

登下校通知システムとは、子供のランドセルに IC タグをつけ、校門などリーダーが設置されている場所を通過したときに保護者にメールが送られるというシステムである。先行調査によると、現行のシステムに対する保護者の反応は良好で、「通知があると無事ついたとわかるので安心するので、電車に乗ったこともわかるとなおいい」「通学路すべてにリーダーを設置してほしい」といった、より強化されたシステムへの希望も少なくなかった。情報技術の専門雑誌や総務省の報道資料などでも、ユビキタスネットワーク社会を見据えて、より強化されたシステムのモデルが提案されており、本研究ではそれらのメリット（セキュリティ確保）とデメリット（プライバシー侵害）を記述した 6 つのより進化したシステムシナリオを作成し、さいたま県の私立小学校の保護者（333 世帯、有効回答率 78%）に対し、質問紙調査を行った。6 つのシステムシナリオに対し、それぞれ 7 段階尺度で好感度を選択してもらったところ、6 システムすべて好ましいとした人から、すべて好ましくないとした人まで回答は分散した。そこで説明の仕方や、子供・保護者の属性によって、より強化されたシステムへの受容度がどう影響されるのかを統計的に調査した。

結果、IC タグの無線通信は暗号化されていない、電波の到達距離が 30 m 以上ある、といったような個別の技術的な知識の有無はシステムの受容には影響していない一方で、「通信が暗号化されていないうえに電波の到達距離が長いため、子供の位置情報が傍受される危険性がある」などのようにプライバシー問題を具体的に説明されたほうが、受容に影響した。また、子供の年齢や性別、通学時間や送迎の有無といった子供の属性や環境ではなく、保護者個人の性格（過干渉・子育てに自信がない）が強化されたシステムの受容に影響を及ぼしていることが示唆された。

さらに、自由記述回答欄からは「余計な機能はわずらわしい」「居場所を把握する以上のことは期待していない」「子供の安全には親だけが責任を持っていけばよくて、情報を共有する必要はない」といった、ネットワーク端末・回線のさらなる発達には期待していないという声も見られた。さまざまな可能性と同時に懸念も示されている技術であるだけに、このような実際の利用者の声を抽出・分析していくことが、今後必要とされるだろう。

2009 年度 STS Network Japan 総会報告

STS Network Japan 事務局

2009 年 3 月 28 日 (土) 12:00 ~ 13:00 於 大阪大学中之島センター

1. 2008 年度事業

- ・夏の学校 2008 2008 年 8 月 1 日 (金) ~ 3 日 (日) 宿泊先: 宮城県奥松島 25 名参加
「科学技術とイノベーション」
- ・研究会・連続購読会
STS Network Japan 研究会 (主催) 於 東京工業大学
2008 年 4 月 4 日 (金) 17:30 - 19:30
「ペアード『物のかたちをした知識』を読む」
2008 年 6 月 6 日 (金) 17:30 - 20:30
「ハッキング『表現と介入』を読む」
2008 年 8 月 1 日 (金) 17:00 - 19:00
「ハッキング『表現と介入』を読む」
2008 年 10 月 3 日 (金) 17:00 - 19:00
「ハッキング『表現と介入』を読む」
2008 年 12 月 5 日 (金) 17:00 - 19:00
「ハッキング『表現と介入』を読む」
2009 年 1 月 30 日 (金) 17:00 - 19:00
「ハッキング『表現と介入』を読む」
- ・冬のシンポジウム 2009 年 1 月 24 日 (土) 於 京都大学芝蘭会館別館研修室 2 参加者 23 名
「変遷する『正常』」
- ・春の研究発表会 2009 年 3 月 28 日 (土) 於 大阪大学中之島センター 2F 講義室 1 発表者 6 名
- ・News Letter の発行 (1 回)
- ・事務局会議 (2009/1/16) その他作業など
※ 他にも ML で随時情報交換、文字チャットも使用

2. STSNJ の状況 (2008 年 3 月 28 日現在)

会員数 189 名 (過去 2 年に会費を払った人)

3. 2008 年度会計報告 (会計: 中村征樹, 会計監査: 定松淳): 次ページ参照

4. 2009 年度事務局人事

代表: 標葉隆馬	事務局長: 江間有沙	会計・名簿管理: 中村征樹
会計監査: 春日匠	庶務 (郵便物管理): 柿原泰	Web 管理: 夏目賢一
企画委員: 随時募集	ML 管理: 加藤源太郎	夏の学校実行委員長: 中川智絵
夏の学校副実行委員長: 標葉隆馬		編集: 春日匠 / 隠岐さや香 / 江間有沙

5. 2009 年度事業計画

- ・夏の学校

日時：9月4日（金）～6日（日） 場所：石川県青少年総合研修センター

テーマ：科学技術コミュニケーション再考

- ・STS Network Japan 研究会（関東と関西で定期的に）
- ・News Letter の発行（年3-4回）
- ・STSNJ 20周年企画

6. 2009 年度予算計画：次ページ参照

会計報告（会計：中村征樹、会計監査：定松淳）

2008 年度決算報告

2008 年度会計 中村征樹

※（ ）内の金額は、昨年度総会で提案された予算案の金額

<< 収入 >>（2008.03.21 から 2009.03.27）

前年度繰越金	2,386,943 円
会費	83,500 円 (200,000 円)
Yearbook 売上	0 円 (0 円)
年度小計	83,500 円 (200,000 円)
合計	2,470,443 円 (2,386,943 円)

<< 支出 >>（2008.03.21 から 2009.03.27）

News Letter 発送費	37,974 円 (300,000 円)
※ NL 印刷 36,954 円、発送作業手配 1,020 円	
（郵送料、発送作業バイト代は次年度に繰り越し）	
シンポジウム・総会経費	126,445 円 (200,000 円)
（冬のシンポジウム：講演謝金 30,000 円、講師交通費 29,440 円、会場利用料 33,405 円、総会：会場利用料 33,600 円）	

通信費	19,245 円 (80,000 円)
※ NL 以外の郵送費（夏の学校案内送付 19,005 円、事務局関連経費 240 円）	
雑費(封筒・文具等)	4,956 円 (40,000 円)
*封筒・宛名ラベル	
テープおこし	0 円 (120,000 円)
Web 関連費	11,000 円 (12,000 円)
※レンタルサーバー代	
夏の学校補助費	85,248 円 (12,000 円)
Yearbook2001 印刷費 0 円 (300,000 円)	
Yearbook2001 発送費 0 円 (50,000 円)	
Yearbook2001 発送バイト代 0 円 (10,000 円)	
シンポジウム報告集 2005 印刷費 0 円 (10,000 円)	
シンポジウム報告集 2005 発送費 0 円 (50,000 円)	
シンポジウム報告集 2005 発送バイト代 0 円 (10,000 円)	
シンポジウム報告集 2006 印刷費 0 円 (10,000 円)	
シンポジウム報告集 2006 発送費 0 円 (50,000 円)	
シンポジウム報告集 2006 発送バイト代 0 円 (10,000 円)	
事務局会議開催費 0 円 (20,000 円)	
年度小計	284,883 円 (1,152,000 円)
次年度繰越金	2,185,560 円 (618,885 円)
合計	2,470,443 円 (2,170,885 円)

夏の学校 2008 会計決算報告

支出	項目	金額	収入	項目	金額
	宿泊代	291,165 円		参加費	257,500 円
	※宿泊・食事	250,215 円		※ 6,500(1名)、7,500(1名)、13,000(8名)、	
	会場費	40,950 円		15,000(5名)、17,000(1名)、	
	懇親会費(1日目)	11,506 円		10,000(1名)	
	懇親会費(2日目)	17,592 円		NJ 補助費	85,000 円
	お車代(槍目先生)	35,000 円		※会場費+子供補助	55,000 円
小計		355,263 円		外部講師お車代	35,000 円
NJ 補助費返還分		4,737 円		懇親会会費寄付金	12,500 円
合計		360,000 円	合計		360,000 円

2009 年度予算

STS Network Japan 事務局

※ () 内の金額は、2008 年度予算の金額
<<収入>> (2009.03.28 ~ 2010.03.)

前年度繰越金	2,185,560 円
会費	200,000 円 (83,500 円)
Yearbook 売上	0 円 (0 円)
<hr/>	
年度小計	200,000 円 (83,500 円)

合計 2,485,560 円 (2,470,443 円)

<<支出>> (2009.03.28 ~ 2010.03.)

News Letter 発送費	260,000 円 (37,974 円)
※ NL 印刷・郵送・バイト代	
事務局会議開催費	20,000 円 (0 円)
シンポジウム・総会経費	20,000 円 (126,445 円)
通信費	80,000 円 (19,245 円)
※ NL 以外の郵送費、振込手数料	
雑費 (封筒・文具等)	40,000 円 (0 円)
テープおこし	120,000 円 (0 円)
Web 関連費	12,000 円 (0 円)
※ レンタルサーバー代、ドメイン更新料	
夏の学校開催補助	100,000 円 (85,263 円)
<hr/>	
年度小計	832,000 円 (284,883 円)
次年度繰越金	1,653,560 円 (2,185,560 円)

合計 2,485,560 円 (2,470,443 円)

2006 年第 2 号

夏の学校報告記事に関する補足

ニュースレター 2006 年第 2 号 (通巻 61 号)

夏の学校報告記事 (5 ページ) に、「奈良、大阪の重要な水源でありつつ大和川は地すべりを起こす川としても知られ、土木工学による対策が採られてきたが」とありますが、報告者の趣旨としては「地層に地すべり面があるということであり、大和川が地すべりを引き起こすのではありません」とのことです。ご了承下さい。

会費納入について

このニュースレターが入っていた封筒のラベルに関する説明

お名前の右下に、会費の支払い状況などを示しております。

「03,04 未」と「04 未」は、それぞれ該年度の会費 (2000 円) が支払われていないことを表します。前者に該当の方は、今年度中に会費のお支払いがなければ、それをもって脱会の意志表明と受け取らせていただき、以後 Newsletter の発送を中止します。

「03 不足」は、お支払いいただいている会費が 2000 円には不足している場合で、「不足」の後の数字が不足金額を表わします。お手数ですが差額分をお支払いください。

「臨時」は、「夏の学校」への参加者など、何らかの理由で STS Network Japan に関係がある方に、臨時にお送りするものです。この期間は通常 1 年間ですので、送付が始まって 1 年以内に入会の手続きをとられなければ、以後 Newsletter の送付を停止させていただきます。

会費は、以下の口座にお振込みください。

郵便振替口座 00170-1-63708
加入者名 STS NETWORK JAPAN
(年会費 2,000 円)

振込用紙の通信欄には、(1) 何年度会費 (新規入会の場合は、そのように明記してください)、(2) お名前、(3) ご所属、(4) ご連絡先 (住所・電話番号・e-mail) を明記してください。

※ 新規入会の方の会費は当該年度のものとして扱わせていただき、何月の入会であれ、その年のニュースレターが送付されます。

庶務 (名簿担当) からのお願い

ニュースレターの郵送先に関わる情報、すなわちご住所の変更、ご所属の変更、お名前の変更などがあつた方は、変更前と後の郵便番号、住所、氏名 (ふりがな)、電話番号、e-mail アドレスを事務局あてに、郵送か Fax、e-mail <office@stsnj.org> にてお知らせください。また、STSNJ の WebSite <http://stsnj.org/cgi-bin/application/> において、会員情報の変更を行うこともできます。どうぞよろしくお願いたします。



編集後記

20周年企画として、いくつかの企画を盛り込んでみました。今までのニューズレターやイヤブックを見ていて「いろんなことがあったんだな」と思うと同時に、一人一人その「いろんなこと」の受け止め方は違うはずだよな、とも思いました。今回の、会員へのアンケート調査や、大々的な企画募集は、会員の皆様の「受け止め方」を知るための一ステップであると考えています。ご意見・ご応募をお待ちしております。(A.E)

Newsletter Vol.20 (1) (通巻 No.66)

2009年6月18日発行

編集

STS NETWORK JAPAN 事務局

Newsletter 編集委員会

代表 標葉隆馬

委員 春日匠 隠岐さや香 江間有沙

発行

STS NETWORK JAPAN

代表 標葉隆馬

STS NETWORK JAPAN 事務局

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

平川研究室気付

E-mail: office@stsnj.org

URL: <http://stsnj.org/>

郵便振替口座 00170-1-63708

加入者名 STS NETWORK JAPAN

(年会費 2,000円)